

## 2025 年度 第 1 回 土木計画学研究委員会 幹事会 議事録

日時：2025 年 9 月 10 日（水）15:00–18:00, 9 月 11 日（木）17:00–19:00

場所：ハイブリッド開催

9 月 10 日（水）

（対面）熊本市市民会館第 7 会議室

（Web）<https://us02web.zoom.us/j/89645868920?pwd=UJScGejESlkaxfoUbcXTDwik8QnVXY.1>

ミーティング ID: 896 4586 8920, パスコード: 066510

9 月 11 日（木）

（対面）熊本市市民会館第 7 会議室

（Web）<https://us02web.zoom.us/j/83021041890?pwd=4JJH8IRPxKbOiS5AIKbyPVdD78NEyx.1>

ミーティング ID: 830 2104 1890, パスコード: 402476

### ■ 出席者（敬称略，下線はオンライン）

委員長：佐々木 邦明（早稲田大学）

副委員長：辰巳 浩（福岡大学）（11 日のみオンライン），森山 昌幸（バイタルリード）

幹事長：榊原 弘之（山口大学）

学術小委員会（岸委員長代理・幹事長）：鈴木 雄（北海学園大学）

大会運営小委員会：日比野 直彦（政策研究大学院大学）、有村 幹治（室蘭工業大学）

委員兼幹事：太平 悠季（東京都立大学）（10 日のみ出席），加藤 哲平（長岡技術科学大学），佐藤 史弥（山梨大学）（10 日のみ出席），中尾 聡史（京都大学），兵頭 知（徳島大学），福井 のり子（バイタルリード）（10 日のみ出席），大窪 和明（東北大学）（11 日のみオンライン），神谷 貴浩（中央コンサルタンツ）（10 日のみオンライン），峪 龍一（北海道大学），長江 剛志（鳥取大学），小谷 仁務（東京科学大学）（11 日のみ出席），大山 雄己（東京大学/書記）

### ■ 欠席者（敬称略）

委員兼幹事：村上 早紀子（福島大学），山田 薫（オリエンタルコンサルタンツグローバル）

### ■ 議事（敬称略）

1. 委員長挨拶（佐々木），参加メンバー挨拶（全員）資料 1

佐々木委員長からの挨拶ののち、参加メンバーの一人一人から自己紹介・挨拶があった。

2. 前回委員会の議事録確認（榊原）資料 2

委員から特に異論なかった。

### 審議・報告事項

3. 学術小委員会からの報告（岸（代理：鈴木））資料 3

・特集号の査読状況

・特集号の投稿規定

鈴木委員より、2025 年特集号の査読状況および今後のスケジュールについて報告があった。また、以下の懸念点と対策について共有があった：

- ・ 昨年度は校正作業に時間がかかり出版が遅れた。博士学生への配慮のため採択通知を早くする。
- ・ 特集号投稿資格の「責任著者」の扱いについての問い合わせを受けて、春大会・秋大会や通常号運用との整合性を保ち、学会員の縛りを無くすことを検討中。秋大会までに議論を深める予定。

幹事会では 2 点目の懸念に対して、以下のような意見があった：

- ・ 著者全員が非会員の場合の論文投稿を認めるべきかどうか。
- ・ 会員の縛りがある他の学会もあるが、特に春の論文投稿では会員登録が間に合わないという問題も毎年生じている（交通工学）
- ・ 実務者の学会参加のハードルを下げるという議論からは、会員問わず広めに受け入れる方針がい

いのではないか。

また論文キーワードについて、9/9の討論会の内容を踏まえて、研究を政策に結びつけるための政策キーワードの洗い出しが重要ではないかという意見があった。

以上の点について、学術小委員会での検討ののち、次回委員会で承認を得ることとなった。

#### 4. 大会運営小委員会及び秋大会開催校からの報告（日比野）

資料 4

日比野小委員長より、今年度秋大会について報告があり、以下の懸念点が共有された。

- ・ 論文本数が昨年度より 100 件増えて会場が逼迫。ポスターを増やすことで対応した。
- ・ （結果的にテーマが合わず不採択となったが）高校生からの応募があった。

これに対して以下のようなコメントがあった：

- ・ 高校生の投稿は今後増えるようであれば、幹事会での検討が必要。
- ・ 高校生にとっても参画しやすい分野ではあるものの、学術的発表として適切かどうか検討する必要がある。

また、今年度の春大会についても日比野小委員長より結果報告があった。

#### 5. 調査研究拡充支援金（委員会予算）の配分について（榊原・大山）

資料 5

榊原幹事長より、調査研究拡充支援金について報告があった。

支出可能な主な使途については、

- ・ 旅費
- ・ 委員会主体の調査費用
- ・ 委員会・幹事会の開催のための会場費等
- ・ ウェブサイトの更新費用

などであり、委員会関連で必要な支出があれば委員長・幹事長に積極的にご相談いただきたい。

#### 6. 幹事会業務分担の確認（榊原）

資料 6

- A) 幹事長補佐：                      ○大山，小谷\*                      [○：主， \*：副]
- B) 全国大会担当：                      ○加藤，○中尾，峪\*，大窪\*
- C) 研究小委員会対応：                      ○兵頭，神谷\*
- D) 防災対応：                      ○佐藤，長江\*，
- E) Web 管理担当：                      ○長江，谷下 [能登半島地震対応]、神谷 [小委員会関連]
- F) 広報・ワンデイセミナー等：                      ○大平，村上\*
- G) 出版委員会・IPML 等：                      ○村上
- H) 新規企画担当：                      ○福井，山田\*， [森山，辰巳]

榊原幹事長より、幹事会業務分担についての確認があり、承認された。

#### 7. 重点研究課題募集について（榊原）

資料 7

榊原幹事長より、土木学会の重点研究課題募集について説明があった。

計画学からの応募を増やすための広報の工夫や対象について議論された。結果、基本的には委員会での推薦・調整が必要なため、委員会を通じて応募を促すこととなった。

#### 8. 各担当からの報告

- ・ 学会出版企画の募集について（大平）

資料 8

広報担当の大平委員から以下の報告があった。

- ・ ワンデーセミナーの開催予定：1 件。
- ・ 出版企画は今のところ連絡なし。

報告後、ワンデーセミナーの在り方について議論が行われ、終了が近い小委員会に対して、報告セミナー等のイベントの確認を小委員会担当からする方針となった。

広報担当の大平委員から IPML の登録利用者数が容量制約間近であることについて報告があり、拡大・移行について審議を行なった結果、

- ・ 現サービスの継続・容量拡大を前提に業者に問い合わせることを基本方針とする
- ・ 難しい場合は別のサービスへ移行することを検討することとなった。

加藤委員より全国大会の企画について以下の報告があった。

- ・ 9/9 の研究討論会（ウェビナー）は参加者が約 120 名。途中退出もあまりなかった。
- ・ 9/11 には幹事会特別セッション@熊本城ホール。

9. 秋大会における委員長・幹事長主催スペシャルセッションについて（福井，森山） 資料 9  
学会参加実態調査について（福井，森山） 資料 10

福井委員より秋大会の SS 企画について説明があり、また実務者を対象にした学会参加実態調査の進捗について報告があった。

- ・ 回答は現時点で個人 80、組織 20 程度。
- ・ 9 月末までを予定、状況によっては 10 月初旬まで実施する。

幹事会では主に、組織の回答数を増やす工夫について議論された：

- ・ 会社の中で誰が答えるのか、組織内調整が難しい。
- ・ サンプルが比較的少数でも、考察ができるのであれば数を求めなくても良いかもしれない。
- ・ 部署単位の方が答えやすいかもしれないので、声がけの時に回答者を明示的にすることの検討が必要か。

10. その他

・ 令和 7 年度第 2 回幹事会について（榊原）

榊原幹事長より 3 月の幹事会（合宿形式）の検討状況の説明があった。

・ 研究小委員会のあり方（兵頭）

- ・ 兵頭委員と佐々木委員長からの問題提起に基づき、小委員会の成果、新規設置の基準（目的等）のあり方について、幹事会で議論した。その結果、研究小委員会設置に関して、内規を定めることも検討してはどうかとの意見が出された。例えば、以下の点を満たすもの：
  - 普及活動・情報発信、テーマを広げるための積極的な活動を行う。
  - オープンである。同じ研究テーマについて議論するための仲間を広く募集する。
  - 今後の土木計画学として取り組むべきテーマと考えられる。

今後も継続的に議論していくこととなった。

・フリーディスカッション（60周年記念行事に向けた検討等）（全員）

以降のページにまとめる。

## フリーディスカッション議事録まとめ (9/10, 17:30-17:45 及び 9/11, 17:10-19:00)

### [60 周年企画]

- ・ 10 年ごとに企画が開催されている。2026 年が 60 周年。
- ・ 50 周年は大々的にシリーズ企画として行われた。一方で 40 周年は比較的小規模である。
- ・ 理論と実践の接続は毎回議論されている。今回特有なのは、論文集が二分化されたことや、アカデミア全般として論文中心になってきていること。特別討論会では、接続というよりも相互インタラクション。学会に参加していない方は、研究は役に立たないと思っている？すぐに使えるような研究の蓄積があるにもかかわらず、それが伝わっていない/理解されていない。
- ・ 全国大会での特別討論会・セッションや秋大会企画に接続するような内容も候補として考えられる。
- ・ 「土木計画学のアイデンティティを再構築する」というテーマも考えられる。

### [理論と実践]

- ・ 円山先生から幹事会セッションで理論と実践の研究の分類軸の話題提供があった。理論-実践軸に加えて、現場駆動-先行事例/研究駆動の軸。
- ・ 分類軸をもとに、研究や活動によって得られた成果を機能・演繹のような分け方をして誰もが引き出しやすいような整理ができると良い。
- ・ 知見を積み重ねて、実務の人が引き出せるようにする。今の計画学にはそれはないのではないか。→ **[データベース化]**
- ・ 分類軸で一番難しいのは右上（現場駆動の理論）ではないか。
- ・ 右上が難しいのはその通り、現場課題の問題を認識し、解き方を提示する能力を身につけるのは難しいので、学会としてどう教育するかは重要。
- ・ 現場駆動の理論をどう生むか。単純に左上（現場・実践）と右下（先行・理論）が議論すれば重なるものでもない。
- ・ 左上（現場での実践）が単なる報告になりがち。実務者としては JCOMM では発表しやすいが、理論の裏付けが弱いので計画学で報告しづらい。本来は出て繋がるのが良い。→ **[学会での心理的安全性]**
- ・ 土木学会内の他分野（主に力学系）との共同研究からは、必然的に右上（現場駆動の理論的研究）が生まれるように思う。土木計画学分野内に綴じて考える必要はないのではないか。
- ・ 討論会では、コンサルタントの基本的な技術・分析能力が落ちているという懸念や、示方書・教科書作成などへの期待が挙げられた。
- ・ コンサルタントが均衡配分や非集計モデル等の技術を扱えた時代は、目的意識（需要予測に基づく費用便益分析等）が共通にあったからかもしれない。その共通認識が解けて、それぞれが先鋭化した分、理論に遠い存在になったのではないか。
- ・ 学会として総合的に知見を持ち寄らないと答えを出せない、具体的な課題（新幹線のルートや地方都市の今後）を題材にして議論する機会があると良いのではないか。
- ・ 「現場課題」と一口に言っても分野や個人によって認識が大きく異なる。問題を構造化すること自体が理論と呼べる分野もあるため、「理論」の範囲を広くとることも重要ではないか。
- ・ 討論会の議論では、実践研究がやるだけやって終わっている場合が多い、という懸念も挙げられていた。実践を通じて問題の構造を明らかにすることは重要。
- ・ 実践側が問題の構造化まで行うことが浸透すれば、別の理論の研究者（データやモデル）との相互作用がより起きやすくなる可能性がある。現場での問題からモデルのアイディアが出る場合も多い。
- ・ 国際ジャーナルでもデータ公開を求められることが多い。現場で取れたデータをより使いやすくなると、分類間での相互作用も生まれやすいかもしれない。
- ・ 土木計画も「工学」の一分野なので、社会への還元は重要。災害や交通まちづくりなど、実践にも時間がかかる。そうした理論と実践での時間の違いもある中で、コミュニケーションをどうとっていくか。→ **[実践研究の評価]**

### [学会での心理的安全性]

- ・ 昨年の秋大会では「若手研究者の心理的安全性を確保する」という話題があった。若手研究者はもちろん、実務者が心理的安全に参加しやすい学会を作る必要がある。
- ・ ポスターセッションの方が居心地良いと思う若手研究者や学生も増えている。

### [データベース化]

- ・ 各研究論文が、例え理論研究だとしても、どのような政策に関連しうるのかが分かれば実務側が参照しやすい。研究者の視点からのキーワードだけでなく、政策キーワードの列挙とそれによるタグ付けが必要ではないか。
- ・ 実務側が理論研究のストックにアクセスしやすくするために、メタ分析的なデータベースも必要。
- ・ 特集号というと、普通は関連研究論文のコレクション。今の土木学会論文集特集号はそうではないが、そのような枠組みがあると自分の研究を相対化して見ることもできる。

### [土木計画学のアイデンティティ]

- ・ 「土木計画学」という専門性は一般に通じるのか？都市計画や交通工学は比較的わかりやすい。
- ・ 研究分野が膨張している印象。一つのトピックで集まっても話が噛み合わないこともある。各分類軸それぞれで広がっていくと、計画学というアイデンティティはますます薄れていくかもしれない。同じ分野だということすらわからなくなっていく。
- ・ 土木計画学研究会に参加する時に、何を期待しているのか。他の学会との違いは？
- ・ 交通工学は道路管理者の視点からの研究。
- ・ 土木計画学は年2回あり査読もないので芽生え期のような研究の議論もできる可能性が本来はある。

### [実践研究の評価]

- ・ 研究活動をどう評価するか。論文評価ばかりになっているが、社会的にインパクトが大きい成果がある研究を評価できるようにしたい。そういう意味でも実践の人に学会にたくさん参加してもらって、いい研究を見つけてもらいたい。
- ・ IFに基づく人事評価システムに問題があるのはその通り。論文だけではなく、賞を与えるというのも一つの手である。賞をもらえると研究費申請にもプラスになる。
- ・ 報告だけになっているのは研究として評価しづらい。プロトコル論文などの考え方もある。
- ・ 医学系ではインプリメンテーションサイエンスというか、結果の報告にしても、それがエビデンスとして積み上がるようにスタイルが確立されている。
- ・ 実践を報告ではなく、実験と検証のように、既知のエビデンスと比較の上で位置付けを行なって執筆するようになれば、実践研究をより評価しやすく、積極的に業績としても認められるのではないか。
- ・ 政策と実践の論文集の評価基準をより明確にして、成功事例のみならず、失敗事例を分析・検証する知見が積み上がるようにすることが重要ではないか。
- ・ 実践に時間はかかるが、形になったら論文になるわけではないため、研究としての着眼点を元にもうまくいかなかった実践例含め、実践からの学びを構造的に発表してもらえると良いのではないか。

以上